

日本・地域経営まちづくり塾 ニュースレター

平成25年7月19日

はじめに

目次

- 1 はじめに
- 1 岡田先生の講演
- 3 智頭町の民泊の取り組みについて
- 3 事起こしの戦略的実践支援技法
- 4 四面会議システムの演習
- 5 まとめ

第2回日本・地域経営まちづくり塾が平成25年6月22日（土）に京都大学黄檗プラザにて開催されました。

午前は、岡田先生から、地域経営まちづくりのアプローチ、本塾の在り方について講演があり、その後、澤田様、加藤様より智頭町山郷地区と加藤家の民泊についてお話を頂きました。

午後からは、午前の講演を踏まえて、四面会議システムの演習を行いました。

スケジュール

10:00～11:00	都市地域を整える ～常識のさりげない進化を目指して～	岡田憲夫先生
11:10～12:00	鳥取県智頭町山郷の魅力ある民泊里づくりと 戦略的実践支援技法の学び	澤田廉路氏
	鳥取県智頭町山郷地区民泊の紹介	
	加藤家が目指す民泊サービス	加藤修氏御夫妻
13:00～16:30	四面会議システムの演習 「山郷の魅力ある民泊の里づくり」	多々納裕一先生
16:30～17:00	まとめ	

都市地域を整える ～常識のさりげない進化を目指して～

岡田憲夫先生の講演

これまで都市計画は行政主体で進められるという常識があった。しかし、行政主体のアプローチのみでは不十分である。なぜなら都市・地域（マチ）を整えて行くには2種類のアプローチがあるからだ。2種類とは、前述した行政が主体となって進める手法と、住民一人一人が主体的に動く手法である。理想としては、住民が下からしかけるアプローチと行政の関与が絶妙なタイミングで交わりあい、まさに啄噛同時のまちづくりになるのが良い。このプロセスを念頭に置いて現在の都市・地域（マチ）の整え方を考えると、問題点は大きく2点ある。1点目は、行政側がともすれば「錯覚大樹（一体）症候群」に陥っている点であり、2点目は住民側の主体的なアプローチが決定的に不足している点である。

まず、1点目の錯覚大樹（一体）症候群とは、行政が、自分達は大樹の上に居て、自身が大樹そのものであると錯覚し、地上の住民から遠く離れた樹の上から物を見る状態を表している。この状態においては、「地」すなわち住民が生活を営んでいる生きた現場（しかも多種多様で一くくり出来ない個々の地域の様子）が全く見えなくなっている。いや、それで事足れりとしている。この結果、生きた地域の息遣いを写し取れないままの、いわゆる「机上の空論」の計画に終始してしまう。それを回避するためには行政も住民の眼線の高さで自ら樹を立てて、寄り代（よりしろ）とし、住民と共に工夫を重ねる、まちづくりの樹を育て合う現実のプロセスを踏まえなければならない。こうして作り上げた案（地上に生と所を得た苗樹）は<地上の「空」論>として、それぞれの地で活きる案となる。

都市地域を整えて行くためには行政側と住民側の両方のアプローチが必要である。行政の錯覚大樹症候群、住民側からのアプローチ不足を克服しなければならない。本塾に集う人々の手で、事起こしを始め、Machinovationを広めよう。

ちなみにここでいう「空」論とは、「その地で生きるための基本的要件（栄養素）のようなもの」＝「空」を掴み取った計画の論理になっているということである。現実をふまえない「机上の空論」と、その真反対の＜地上の「空」論＞とは同じ“空”でもまったく意味が異なるのである。

次に、2点目に関しては、住民側からのアプローチを促すために、住民一人一人の力によって小さな村を自ら興していく地域の能力開発や、地域経営まちづくりのアプローチが必要である。本塾の活動は一人一人の事起こしによって住民側の活性化、人材育成を目指している。

都市地域を整えていくにあたり、public, private, semi-public という言葉の意味内容の的確な理解は非常に重要である。public という言葉は、もともとはラテン語で people を指す語から派生した言葉である。すなわち、public は person=人の集合であり、public=government と認識してはいけない。さらに言えば person は一人一人、色も形も大きさも違う粒（個性）であり、その集合体は生き生きしていれば多様な彩りを放つ。これを均質なモノカラーの集まりと考えてしまうとその彩りを拾い切れない。さらにこれからは、半ば public であり、半ば private であるような境界域（semi-public=準公共）を積極的に生み出し、活用していく必要がある。生活空間をもっと質的に豊かに生み出すためには、「ここからは公共・ここからは私有」と厳密に線引きをしない「より幅広で弾力的な公共空間」が切実に求められている。このような空間から新たな人ととの出会いが生まれる。例えば、そのような意図で東屋（あずまや）や日本・地域と科学の出会い館（智頭町）を設けることに至ったケースがそれにあたり、空間を所有する人だけでなく、地域の人々が自由に使える憩いの場となっている。智頭ではこのような小さなセミパブリックな空間をそこかしこに生み出したことが事起こしの実例となった。同時にこのような交流と出会いの場があるので、人は変わることができ。本塾はまさにこの東屋のような場所になってほしいと願っている。マチを考えて行く上で今後もう一度、semi-public を含めて public を捉え直す必要があるだろう。

最後に本塾とは何者かについて考える。どのように名乗るかということでもある。本塾の通称を『興士舎』したい。意味としては、『興士』とは事を興す士（実践士）の集団、『舎』は東屋を示している。この東屋は人々が集う場所であり、塾生が戻ってくる港である。この東屋の下で、多彩な粒によるエリスグレ人のネットワークを構築していきたい。ホームページの名前は、“SMILE-Net”したい。Smart Machizukuri Innovation Learning Network を縮めた言葉である。そして、我々一人一人が事を起こすことから始めるまちづくりを Machinovation として、広めていきたい。

第1回の課題において、塾生からもっと問答をしたいという要望があった。2年目の塾生は1年目のよりも経験を積んでいるからこそ、少し違った振る舞いを見せてほしい。また、受け身ではなく、自分の考えを積極的に述べてほしい。

～問答～

塾生：行政による錯覚大樹（一体）症候群というご説明に大変共感した。そのため、行政の持つ俯瞰的な視座を住民も持つ必要があると思うが、そのためにはどうしたら良いか？

岡田先生：その点については、以前から寺谷さんとお話をことがある。ここでご紹介頂こう。

寺谷さん：例えば、あなたがゴミを拾い続けるという樹を立てる。すると、それを見かけた誰かが声をかける。これは違う樹が立つことであり、やがて声をかけた人がゴミを拾い始める。最初は地面を這って行動していたつもりが、いつの間にか樹を登っているということである。

岡田先生：このように地域が自ら育てた樹の上に人が登る、もしくは組体操のピラミッド（小さな樹）のように人を上にあげてやれば、全体を俯瞰する事が出来る。まちづくりをするに当たり、地上（下）から上へ、上から下へといった様々な視座をもつことが大切であり、この天地スリップが出来る人がリーダーシップをとると、『地上の「空」論』が現実となる。これは役に立たない「机上の空論」ではなく、住民が地上でプロセスを共有しつつ、成解（Viable Solution）を創る事である。なお、「空」はロマンもあり、俯瞰的な視点を含んでいる。地面の中から育った成解は、根本、本質つまり「空」を押さえ、自然に様になる解であり、他の地でも何らかの形で生きる解となる。



岡田先生の講演の様子

前回の課題で、「もっと問答をしたい」という塾生からの要望があった。2年目の塾生は、1年目のひととは違った振る舞いを見せてほしい。受け身ではなく、自分の考えを積極的に述べてほしい。

事起こしの実践演習ケース 1

鳥取県智頭町山郷の魅力ある民泊里づくりと戦略的実践支援技法の学び

鳥取県智頭町山郷地区民泊の紹介 澤田廉路氏の講演

四面会議のための情報提供として智頭町の民泊について紹介する。

智頭町は鳥取県の南東部に位置し、山郷地区は山間部で 1000m 級の山もある。鉄道や道路も通っており、鳥取市まで約 30 分～1 時間、大阪にも約 2 時間でアクセスできる。土地利用としては 92% が林野であり、自然景観に恵まれている一方で可住地が非常に少ない。主産業であった林業が衰退し、徐々に活気が薄れている。周辺の地域も同様の傾向にある。人口減少が顕著であり、出生数が毎年半減している（2000 年は 34 人）。その影響から現在では小・中学校が一校ずつとなった。

山郷地区は峠越えの街道沿いに位置しており、昔から参勤交代などにより往来が盛んであったため、外の人との交流を厭わない歴史的背景を持っている。近年は、1985 年（S60）のわかとり国体で空手選手の受け入れに民泊が利用されたり、CCPT（智頭活性化プロジェクト集団）の活動によって海外の方々との交流が始まっている。

このようなイベントの中で寺谷さんとともに活動を始めてきた。私は普段の県での仕事とここでの民間の活動という、岡田先生の仰られた semi-public な立ち位置で活動を続けてきた。1987 年くらいから岡田先生等が智頭町に入ってこられるようになり、その後は京都大学などの専門家とグループワークを重ね、新山郷村建設計画の枠組みを構想してきた。特に料理、特産品などに関して実際に試食会・味自慢コンテスト等のイベントを開催してきたが、このような活動が民泊にも活きてくると思っている。

次に加藤夫妻の民泊を紹介する。加藤夫妻の民泊は駅からほど近く、広い居間が特徴である。加藤氏は登山家であり、また写真家、ハンターでもある。加藤家の食卓には近辺で採れた食材を使った料理が出される。加藤家を含む智頭町の民泊の現状と課題としては以下のようなメリット・デメリットが挙げられる。

メリット：森林セラピー、学会等の関連で意識の高い人々が来客。
専門的な人や他地域の人と親しく話が出来て楽しい。

デメリット：手間がかかる割に利益が上がらず、モチベーションが上がらない。一人を泊めるとなると割高になる。

（料金：1 泊 6800 円の内保険料 240 円、民泊協議会経費 1060 円）

現在は鳥取環境大学の石崎君の協力もあり、ホームページの開設や、大学の学祭に料理を出展する等の PR を行っている。この塾で第三者の目から見たアイデアを出して頂きたい。



智頭町の概要について説明する
澤田さん



民泊の現状について説明する
加藤さん御夫妻

加藤家が目指す民泊サービス 加藤修氏ご夫妻の講演

加藤修氏

まちおこしは若い時から青年団に所属して関わってきたが、民泊の経営を妻に任せており、経営感覚はあまりない。今年の 4 月から自由人となり、今は食材の確保に従事して民泊に関わっている。塾に参加する中で自分のプラスになることがあればと考えている。

民泊を行っていく中で個人としてやりたいことは、自然とのふれあいである。智頭には自然がたくさんあるので、知られていない植物などを探していく。また、町の境界 85km をロングトレイルのコースとして興味のある人に紹介したいと思っている。

加藤眞由美氏

今回は柿の葉寿司と笹餅を持ってきた。前回の塾を終えてから、私の事起こしとして、名刺を作り、裏にメニューを記載して配布するようになった。今後はメニューを増やそうとしており、お菓子や匂い袋を作ることを考えている。

民泊に宿泊する客数は、年 50 人強、全体は 500 人程度である。旅館は 3 件あり、民泊にお客を入れると旅館にお客が来ないと文句を言われることもある。しかし、私は同じ料金なら民泊の方が待遇が厚くお得だと思っている。

智頭町への来客は倍増している。理由はセラピーを受ける人達の増加であるが、来訪する時期が決まっている。ハイシーズンは夏であり、冬もスノーシューなど新たな取り組みを始めているが、冬は田舎の家は寒く、暖房費等がかさむために民泊を断る家が多い。そのため、一部の民泊に集中してしまうこともある。

塾生の質問

- リピーターはどれくらいいるのか。
→約 1 割である。民泊の指名ができるようになり、最近ではパンフレットを作成したこともあって民泊を選ぶ人が多くなつた。
- 加藤家の民泊のキャパシティはどの程度か。
→加藤家では一度に 7 人泊めたことがある。
夏、雑魚寝で 10 人までは可能であるが、風呂が一つしかない点がネックになる。隣の岡山県に、車で約 10 分の所に粟倉温泉があるが、智頭と粟倉を結ぶ道路は鳥取道の一本である。鳥取道には道の駅がない、出口が一方にしかない等、不都合な点が多く、智頭と粟倉が連携した活動がしづらいところがある。
- 稼働率はどの程度まで可能か。
→稼働率は、週一ペースでないときつい、家族連れは少ない。
- 民泊は何軒あるか。
→智頭町に 40 軒（山郷地区に 5 軒）
- セラピーについて。
→講師を呼んでガイドを育成しているが、町外からただ資格を取りに来る人もいる。内容はヨガをしたり、ハンモックで休んだり、景色を見るなどして療養する。利用者は自分から療養の必要性を感じてやって来る。最近は企業との協力もしている。ハイキング等、レジャー目的で来る人もいる。
- もっと民泊ごとの特徴を出したほうがいいのではないか。
→協議会によって、一律の料金が定められている。
- 採算がとれるのは何人からか。
→一人客では厳しく、4 人以上の団体客で採算がとれる。

塾生からの意見等

- 自然が多く都会から興味を持つ人がいるので、年配の方々より家族連れをターゲットにすればよいのではないか。
- 料金が高いのではないか（泊まるだけならビジネスホテルのほうが安い）。
- 他の地方では、古民家を活用した長期滞在を行っているところもある。ここで自己史を書くことに利用する人もいる。
- 新しい人との出会いや発見を求める人もいるのではないか。例えば、他の利用者との相部屋といった取り組みができるのではないか。
- 加藤家のやりたいことを推していくべきではないか。



加藤さんが差し入れて下さった
笹餅と柿の葉寿司

四面会議システム実施演習「山郷の魅力ある民泊の里づくり」

多々納裕一先生

テーマは仮設定であり、ディベートを進める中で最適なテーマを見つけていく。キャッチフレーズが生まれればなお良い。四面会議は地元の人と共に行うことを前提とする。現場ならではの知恵・工夫・土地勘を持っている人がいれば、議論を進めやすくなるが、大事なことは、「自分たちでできること」を考えることである。今回はブレインストーミング、ディベートの後に、事業実施計画書の作成まで行ってもらう。

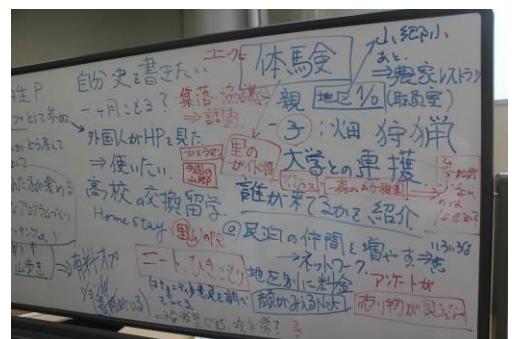
「総合管理」

- ・1年目：受入体制の構築（窓口、連絡、ルール）、行政・協議会との調整（料金、内容）、コミュニティづくり（地域）、連携先の調査・研究（他の民泊、地域、NPO、大学等）
　　スポンサー探し、ゆるキャラ募集企画
- ・2、3年目：サービスの差別化（加藤家だからできること、民泊のバリアフリー化等）、コミュニティづくり（リピーター）、受入民泊の増加、他地域との競争
- 目標：継続的に民泊者数を維持するしくみづくり
　　（行列のできる民泊）



「人」

- ・1年目：サービス
　　（ハイキング、トレッキング、いのしし、しか、料理、写真）、フェイスブック（加藤さん）人材塾参加者とつながる、民泊運営者同士のつながり→各民泊でできるサービスをまとめ、カメラマン
- ・2、3年目：3ヶ月に1度来てくれるリピーターを作る、親子連れが集まる、留学生が集まる
- 目標：加藤さんのファンが集まる民泊
　　（智頭町に頼らない個としての）



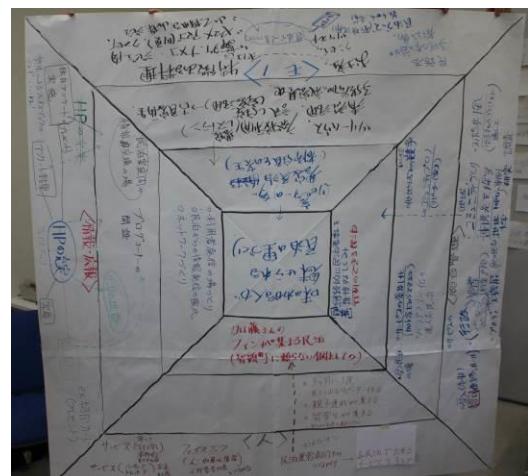
「情報・広報」

- ・1年目：口コミ（紹介カード&プレゼント）、HP・Facebookの充実（写真の掲載）、独自アンケートの実施、アンケート結果の反映、人材塾生によるフェイスブックのシェア&いいね！
- ・2、3年目：民泊家庭間の情報交換の場、リンクの拡散、ブログコーナーの開設
- 目標：利用者発信の場作り・民泊からの情報発信の強化
　　ネットワークづくり



「モノ」

- ・1年目：民話本、子供に昔の遊びを教える場、民泊グッズ、お土産（燻製、漬物）、特長ある料理、キノコ（舞茸、ナメコ）、ジビエ肉、川魚（ヤマメ、アナゴ：燻製）、山で取れる山菜・ジビエ
- ・2、3年目：ツリーハウス、清流活用、子ども参加の秘密基地、廃校利用（農家レストラン）、試し住宅（空き家活用）→古民家再生
- 目標：客（リピーター）の多い農家民泊（都市住民との共生）



四面会議を終えて ~まとめ~

岡田先生

四面会議の誕生秘話はいろいろあるので、追々話していこうと思う。今回の四面会議を通じて、対象地に行ったことのない人も現場に立った考えができたのではないか。そして四面会議が、人と人が出会い、仲間になるための場づくりの役割も担っていると感じてくれたのではないだろうか。四面会議はいろいろな側面があり、その学び方も画一化は難しい。ただその本領を体得するためには、必ず皆で実践する行動計画を立てることである。たとえば3日後には実行に移すつもりで議論を煮詰めていくことだ。四面会議のもう一つの妙味はwin-loseなディベートではなく、win-winなディベートで、よりよい計画を立案できるところにある。それぞれのグループがWin-win more and more togetherの気持ちを持って、どう盛り上がり、盛り立てるかという視点で四面会議に臨んでほしい。

寺谷さん

四面会議はすべてのグループが重要な役割を担うが、その中でも総合管理に期待されるところは大きい。なぜなら、総合管理では内と外とのコーディネーションを行うだけでなく、夢の管理、夢の踏みもしていくいかなければならないからである。加藤家のことだけ考えるのではなく、外との交わりも持つてサクセスモデルを追いかけなければならない。ただし、管理のことばかりに気をかけていると、逆に見えなくなることもあるので注意が必要である。私たちは常に現場に立った考え方方が求められる。時間がなくともやれるのか、お金がなくてもやれるのか、といった経営感覚が必要だ。人が集まらなければ自分が呼び水となって集める。お金（税金）がなければ補助金を呼び込む。このように、いろんなところでいろんな人と交わることで、まちを作り上げていくのである。

特別寄稿

テキスト解題 五重の塔（五層）モデル：

セミパブリック空間としての「黄檗プラザ」の働きを見て取り、デザインする眼

塾頭 岡田憲夫

セミ・パブリックな空間も公共空間である

私達が毎回塾を開いている京都大学黄檗プラザは、地域経営まちづくりそのものの事例とはなりませんが、行政機関がすべて計画し、管理するのではない形で、新しい公共空間が生み出される可能性を検討する上で、興味深い洞察を導くことができると思います。

五重の塔は、「広い意味での社会基盤」の重層性を表わしています。ここでいう「広い意味での社会基盤」とは、たとえば私たちがいつも使わせてもらっているセミナールームであり、他の会議施設、ホールであり、レストランと、同じフロアに隣接され、ゆるやかにキャンパスの外にも開放された多目的オーブンスペースのことです。つい一昔前はこのキャンパスは古ぼけた塀や垣根で外部と隔てられていました。それが取り払われて、敷地の一部は地元の役所が整備・管理する道路として拡幅されました。これによって生み出された歩道空間とそこより内側の緑の芝生のオーブンスペースは、異なる管理主体の下にあります。一般的の利用者には一体と感じられます。大学研究棟とこの道路に接する敷地境界の間の「公共空間」は、いわば公的利用（行政管理の道路）と公的利用（独立行政機関・京都大学の研究推進空間）の糊代的（インターフェイス）空間の役割を果たしています。そのようなインターフェイス空間を私たちはある意味、私的に利用しています。でもここで行っている塾の活動は、人と人が出会い学び合う場があるからこそできることであって、それは単なる私的利益を求める活動ではありません。このように考えると、私たちの都市・地域には、行政機関だけが司る狭い意味の「公共空間」だけではなく、多様なインターフェイス空間が必要である。いやむしろそのような糊代があるからこそ可能になるマチの営みがそこで展開される。この意味で、この黄檗プラザは公的であって厳密には公的でない、私的であって厳密には私的でない、つまり準公共的・準私的な空間だと解釈できます。これを私たちはセミ・パブリックあるいは準公共の空間だということにしています。これも含めて広い意味の公共空間であり、「マチの空間」であると考えることができます。

公共空間は多層的構造で成り立っている

テキストP12の注5ならびにP41のモデル1の五層モデルの説明を参考にして下さい。

黄檗プラザを引き続き例にとって説明します。公共空間を整えるということは、たとえていえば実は多層な建物を建てることに相当します。「物理的構造物」は、その一番分かりやすい層かもしれません。目に見えて、文字通り、建物の形を取るからです。私達の生活はそのような基盤に乗っかっています。「建築空間・土地利用」や、その下の「(土木)社会基盤」(狭義の社会基盤の層)がそれに相当します。昔は塀で囲まれていた構内を開放し、オープンアクセスできる「緩衝地帯」を大学研究所コンプレックスと、隣接した道路空間(地方の行政が管理する公共空間)の間に入れることができました。これはまさにセミパブリック空間です。これも「建築空間・土地利用」の層を整えることに相当します。しかし、このようなことが可能になるための条件付けをさらに下の層が担っている。これは多くの場合、直接は見えません。

黄檗プラザができるためには、京都大学が独立行政機関という制度的適用で組織変革されていたこと(政治・経済・社会の層に相当しますね)が重要な条件付けになっています。これによって大学が貯めていた自己資金などでこの広場の整備ができました(以前の国立大学ではそのような財政運用は認められていませんでした)。大学は文化に大きく関わる施設でもあり、役割も持っていますから、このような制度的変革が可能になるためには、文化や慣習の層の変革も不可欠であったわけです。(下の層ほど原則的にはゆっくりとしか変革することはできません。)これができたのもいろいろな革新された制度的適用があったからこそです。ここを一般の公道とみなすならそれに応じた消防法の適用がある。セミパブリックな空間の整備は、既成の法律の中で、それをいかに多義的・状況適応的に当てはめるかという「先例づくり」の社会実験でもあります。

上述したように私たちが黄檗プラザのセミナールームで毎回開いている「塾の活動」は、そのようなインターフェイス空間(五重の塔の第四階)のさらに上(最上階)で繰り広げられる半日単位の活動です。この小さな五重の塔は、黄檗地域という五重の塔や、それより広く、大きい宇治や京都府、近畿といった五重の塔の中に、まるでマトローシュカの入れ子人形のような構造を繰り広げています。あるいは京都大学全体のキャンパスネットワークという、マトローシュカの入れ子も考えられます。いろいろな解釈ができますので、皆さんも想像をめぐらしてみて下さい。ここでぜひ気づいてほしいことは、上で述べた各層の意味内容や働きの多くは、「そのままでは見えない」ソフトなものだということです。しかしそれが見えるかどうかで、皆さんが見て取れる世界は変わって来ます。気づきも代わり、デザインの仕方もそれによって変わる。そのような「社会システムの眼鏡」を掛けることができるかは、地域経営まちづくりにとってとても大切なことです。本塾ではその妙味を感じてもらうことも一つの大きな狙いであり、特長でもあるのです。

「社会システムの眼鏡」にはまだこのほかにいろいろとあります。これで見えるようになるためには、経験や学習も不可欠です。また少し流儀は異なりますが、寺谷さんや平塚さんがいう「視点・観点・気点」といった社会システムの見立ての眼鏡を身につけられているかどうかにも大きく依存するのです。

編集後記

四面会議を経験して2回目、当事者意識で自分にできることを考えることがどれだけ大変かということを実感しています。しかし一方で、誰でもすぐにできる「こと」を積み重ねて、長期的な目標を形成していく過程を見ると、一人が頑張っても何も変わらないと思い込んでいた常識が少しづつ変化し、一人一人の力でまちをつくることはできるのではないかと思うようになりました。

このニュースレターや四面会議での発表、岡田先生のご講演を通して、言葉を選ぶ難しさを感じています。まだ言葉に言い表せない自分の中での考え方を、今後の塾を通しながら少しでも表現出来るように頑張っていきたいと思います。(岸本治)